

---

# 異世界対応マニュアル！

佐藤 和樹

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

異世界対応マニュアル！

### 【Zコード】

Z8517Z

### 【作者名】

佐藤 和樹

### 【あらすじ】

突然異世界トリップしたさえない研究員黒崎誠。しかし、彼の手元にはそんな時のための心強い味方があつた！

## プロローグ（前書き）

あらかじめ掲示しておきますが、この作品の更新は不定期です。 その点を了承下さい。

# プロローグ

## プロローグ

「どうしよう、明日まではとても終わらないぞ」

西暦二二二二年。次元宇宙研究所と呼ばれる研究所。そこで一人の男が唸っていた。男の名前は黒崎誠、この研究所の平研究員だ。

今、彼の目の前にある空間ディスプレイには大量のソフトが表示されていた。明日までに彼が処理しなくてはならないソフトである。このソフトたちが彼を唸らせていた原因だつた。

「これ終わらせないと主任切れるからなあ、でも終わらないよな、これ」

誠は仕事の量に絶望してため息をつく。彼の小さな研究室をどんどんよりとした空気が覆つた。

「現実から逃げれたらいいのに……はあ」

誠が現実逃避に走り、二度目のため息をついた。そしてコーヒーを一口すすり、現実に戻る。彼が困った時にするいつもの行動パターンだ。

彼がコーヒーカップを置いたその時、研究所内にサイレンが鳴り、放送が流れ始めた。

「職員の皆様にお知らせします。ただ今研究所内の次元が大変不安定となつております。つきましては避難場所の方をよろしくお願

い致します。繰り返します……」

「マジか。こんな時にかよ。俺もついてないな」

誠は放送内容に悪態をついた。なにせ、これで彼の仕事が間に合つ可能性がほぼ無くなってしまったのだから。しかし、なつてしまつたものは仕方がない。誠は荷物をまとめて避難場所に行く準備をする。

「主任にどうやつて謝るつか。あのヒステリックだからな……」

誠は仕事を間に合わせることを潔く諦めた。さうに上司に謝る算段をつけはじめる。

彼はそうして上司に対する言い訳を考えながら、研究室のドアを開けた。研究室の今時珍しい木製のドアが誠の手でなめらかに開かれる。

「あれ、どこだここ……」

ドアを開けた誠の目の前には深い森林が広っていた。木々が生い茂り、小鳥の鳴き声なども聞こえる。今時地球のどんな奥地にもこんな場所はない。もちろん研究所の中にこんな場所はない。誠は後ろを振り返った。研究室や研究所の影も形もない。ただ前と同じ森が広っているだけだった。誠はあまりに突然の出来事に言葉を失う。しかしすぐに比較的冷静に戻った。

「まさか俺がトリップすることになるとは……」

誠はすぐに思い当たる現象があつたのだ。

異世界トリップ。一般的にはありえないとされる出来事だらう。

しかし彼の所属する研究所では滅多にないが、ありえないことでもなかつた。

彼はしばらく思考を停止させた後で、手に持っていたかばんから端末を取り出した。ちなみに彼の持っているかばんはたくさんものが入る無限容量かばんだ。

「マニユアルが確かあつたよな……。あつこれだこれだ

誠は端末の膨大なデータの中からあるマニユアルのデータを選び出した。彼の研究所はあらかじめこういった場合に備えてマニユアルを用意しているのだ。

誠はそのマニユアルを見るべく端末の画面を切り替えた。画面に異世界対応マニユアルという文字がデカデカと表示された……。

## プロローグ（後書き）

感想・評価をお願いします。

## 第一話 異世界初の出でで（前書き）

連日投稿できました！

## 第一話 異世界初の出会い

「異世界で初めて起じるひと。それは美少女との出会いだらう」

異世界トリップ経験者の証言より

### 第一話 異世界初の出会い

マニュアルを開いた誠はすぐるよつた思いで読み始めた。マニュアルには次のように書かれていた。

#### 『目次

- 1、異世界でまずははじめにすべきこと
- 2、いつにいつ時じづかるか？ Q&A
- 3、異世界で役立つ現代知識集
- 4、経験者は語る先輩トリップバー体験談

いろいろ目次に書いてあつたが、とりあえず誠は『1、異世界でまずははじめにすべきこと』を読むことにした。

『まずははじめに異世界では落ち着きが大切です。精神をできるだけ落ち着かせましょ。ただし、深呼吸は有毒ガスを吸う恐れがあるので厳禁！』

誠はそこまで読むと、地面の上に座り込んだ。そして何も考えずに頭を真っ白にする。森林浴の効果もあつたのか、誠はすぐに落ち着くことができた。落ち着けたところで、誠はマーカーの続きを読む。

『次に、周囲の状況確認です。足元に気をつけて散策してみましょう。周りに長い棒などがあれば、それを杖のように使うと良いです』

誠は周囲を見回した。そして目の前に落ちていた木の枝を拾う。その長さはちょうど誠の身長の半分ほどあった。それをマーカー通り、杖の代わりにして一步一歩慎重に辺りを散策する。

「す、普通の森だ」

誠はしばらぐしたところで思わず言つた。時々派手な原色系のキノコとかあるが、地球の森とほとんど変わらない。

誠は異世界の森に安心したような、がっかりしたような複雑な気分になつた。そしてなんだか気疲れしたので、岩に腰掛け休憩する。

「何だ、何か起きてるのか？」

誠が一息ついていると、遠くから悲鳴のような声が聞こえた。何事だらうかと誠は慌てて聞き耳を立てる。また悲鳴が聞こえた。誠から見て東の方角だ。誠は誰か襲われているかもしれないと思つた。そこで誠はその誰かを助けるべく、着ていた白衣のポケットに石をぎつしり詰め込んだ。そして悲鳴の聞こえた方に向かつて走り出す。少しの間、足場の悪い森の中を懸命に走つたところで、誠は森の中の木々が生えていない広場のような場所についた。その

場所で、狼のような生物と少女が対峙していた。多分、少女が悲鳴をあげたのだろう。

「あれは狼なのか……。育ち過ぎだろー。」

誠は狼らしき生物を見て叫んだ。その生物は狼のような姿をしていたが、バスぐらいの大きさがあつたのだ。

「兄ちゃん危ないで！ 私のことはええから早く逃げやー。」

大昔の中東風の服を着た少女がなんと関西弁らしき言語で話しつけてきた。驚きのあまり誠は口をあんぐりと開く。

「兄ちゃん何しどんやー、逃げんと食われてまつでー。」

少女は動きが止まつて、誠に向かつて再度叫ぶ。少女の声で誠は正気に戻つた。

「俺が逃げたら君が食われるんじゃないのか？」

少女は短剣のような武器を構えていたが、素人であることが同じく素人の誠でも見てとれた。

「兄ちゃんだけでも逃げるんや。私のことはもうしゃあない

少女はきつぱりと言つ切つた。誠はその言葉に頭を抱える。実は、誠の身体能力は非常に高い。それは宇宙時代、様々な星で暮らすため人類全体に遺伝子改良が為された結果だ。

だから、あのでかい狼にも全く勝てないといつ訳ではない。かなり確率は低いが勝てるかもしれないのだ。

誠が戦うのか逃げるのか迷っている間にも、狼は少女を喰らわんと唸りを上げた。

「やつぱり見捨てるわけにはいかない！ 助けるぞ！」

誠は戦う決意を固めた。石を手に取つて、狼の鼻の辺りを狙い投げる。ヒュンと風を切る音がして石が狼の鼻に直撃した。狼の鼻に石がめり込み、おびただしい量の鼻血が噴き出す。

「キャイン！ キャイン！」

痛みに耐えかねた狼は負け犬のよつた情けない吠え方をして、森の奥に逃げていった。

「兄ちゃんどんな身体の構造しとるんや！ ありえんで！」

少女は誠の非常識な力に呆れたように叫ぶ。しかしあつと驚いていたのは誠の方だった。

「俺だつて驚いてる。この間の健康診断は全部正常だつたのに…」

自らに突然超人的なパワーが湧いた誠は混乱し始める。そこへ少女が近づいてきた。少女は誠の身体を興味深そうに触り始める。

「筋肉は意外とないね……。魔力で強化しとるんかな？」

少女は誠の身体を触りながらぶつぶつとつぶやく。誠は少女の様子に驚いて飛びのいた。

「いきなり触るな！ もつと人のことを考えてくれ」

誠はそうこうと少女に少しきつい顔をした。少女は頬を膨らませた。

「ケチやなあ、少しひらこええやないの」

「ケチじゃない、君だって俺にもし触られたとしたら嫌だろ?」

誠は説教するように言った。誠がそうこうと、少女は身を小さくしてつぶやいた。

「もしかして触りたいんか? ダメやで、こんな森の中なんやから」

少女はそういうとイヤイヤと身をよじる。そんな少女の悪ふざけに誠はやれやれと思った。しかし、すぐに気を取り直すと少女に頼みごとをする。

「それはまあいいとして……。すまないが、俺も一緒に町まで連れて行つてくれないか?」

誠の頼みに少女は顔をほこぼまして笑つた。

「もちろんええよ。ウチの方から頼もうかなつて思つてたど! もちろんええよ。ウチの方から頼もうかなつて思つてたど! ウチは商人やつてる!」「よろしくな!」

誠はミリの好意に感謝しながら自己紹介をした。

「俺は黒崎誠、誠つて呼んでくれ」

「俺は黒崎誠、誠つて呼んでくれ」

える。

「マコトせな、ちやんと覚えたよ。そんなら行こうか。急がんと町に着く前に日が暮れるから」

リリは傾いてきた太陽を指差した。そして早速出発しようとする。

「待つてくれないか、向こうに荷物があるんだ」

誠はかばんを置いた所の方を指で示した。かばんの中には大切なマニコアルの入った端末もある。絶対に取りに戻らなければならなかった。

「なら私はここで待ってるから、早う取つて来て」

リリはそりこりと背中に背負っていたリュックのようなものを降ろした。誠はそれを見るとすぐに駆け出した。

「えらい早かったね。行こうか」

誠は尋常でない速さで行つて帰ってきた。道に慣れたのもあるが、それ以上に謎パワーに目覚めたのが大きいだろう。

町についたらマニコアルをしつかり読まないとな、と誠は思った。そう思っている間にも誠とリリは町に向かつて進んでいた。

## 第一話 異世界初の出でで（後書き）

感想・評価をお願いします。

## 第一話 IJの世界での田嶋（前書き）

マニコアルの出番が……。これからは要所要所にでるように工夫します！

## 第一話 IJの世界での田標

「異世界の仕事は商人と冒険者しかないのだろうか」

異世界トリッパー研究家の証言より

誠とミラは森を抜けて街の前に来ていた。誠たちの目の前には巨大な門がそびえていた。さらにどっしりと重厚な造りの堀が街の周りをぐるりと取り囲んでいる。外敵に備えてだらう。堀の外からでも建物の屋根などが見える。かなり大きな街のようだ。

「どうや、立派やろー。」Jがこの辺りで一番栄えてるアールやで!」

ミラが誠に向かつて自慢げに囁つ。しかし誠はその間にもマーユアルに田を通していた。

「ふむふむ、なるほどなるほど……」

ミラの額に血管が浮き出た。さらに形の良い眉が吊り上がる。

「ヒヒマコト! 無視するな! まったく……こんな美少女が話してるとやからしつかり聞きや」

ミラは呆れたように舌うとため息をついた。誠は慌ててミラの方を見る。ミラはムスッとして頬を膨らませていた。その姿は自ら美少女というだけあって、褐色の肌に燃えるような赤髪が美しい。

「「「めん、 これを見てたんだ」

誠は端末を指差した。ちなみに端末は一見しただけではメモ帳にしか見えない形をしている。

「私にもその本見せて！」

ミラは興味津々といった感じで誠の端末を見た。そのあとミラは誠の目をみつめる。誠はミラの純真な瞳からさりげなく目を逸らした。

「文字が違うから読めないよ」

「それでもいいからちょっとだけ！」

ミラは誠の端末に手を伸ばした。誠は端末を閉じて手を上に上げる。背の低いミラは端末にまったく手が届かない。そこでミラはピヨンピヨンと何度もジャンプする。それでも手は届かない。ミラは恨めしそうに誠を見た。だがすぐに、何か思いついたのか、からかうような口調で話し始めた。

「ははーん、 さてはそれエロ本やな？ だからウチには見せられないんや。 マコトも男やし、 しおがないとは思ひ。 けど眞間からはちょっとと思ひで」

ミラはそう言つて横目で誠を見た。 ここで誠が否定したら、 本當なのか確かめるといつて端末を取り上げるつもりなのだ。 まず間違いなく誠は否定して端末を見せるだろ？ とミラは踏んでいた。 だが端末を見せられない誠は沈黙する。

「アーテ、ヒツチやでー。」

沈黙する誠にミラはからかうよつて言い放つ。そして軽やかに走つて門をくぐつていつた。誠もそのあとを追いかける。

門の向こうには活氣のある町並みが広がつていた。狭い道をたくさんの人々が行き交つてゐる。その道の両側に商店が連なつていた。

ミラはそんな大通りから一步奥に入り、路地を歩く。そして『ミラ雑貨』と看板の掲げられた店の中に入つて行つた。誠も続いて店の中に入つていく。店の中はわざわざまな物が小綺麗に並べられていた。ミラは雑貨屋を営んでゐるようだ。

「リレガミラの店か」

誠はたくさんの商品が整然と並べられた店に感心したよつて言つた。それを聞いたミラは大きく胸を張る。

「せう、リレガウチの店、ミラ雑貨や。結構立派やう?」

そうこうと、ミラはカウンターの中に背中の荷物を降ろした。そしてカウンターの中から手招きする。誠はミラの招きに従いカウンターの中に入った。

「この階段の上が家になつてゐる。つこひきて。ただ足元には氣をつけや」

ミラは階段をきしきし言わせながら昇る。誠は古びた階段に不安を感じながらも昇つた。

「あひやーー。しばらいくななかつたから埃が積もつとるー。」

ミラは埃の積もつた廊下を見て、やつてしまつたとばかりに叫ぶ。そして申し訳なさそうに誠を見た。

「いいよ、気にしないから」

「ありがとな、ウチも家がこんな汚れとは思わんかったんや」

ミラは相当地間家を空けていたようだ。遠くに仕入れにでも行つていたのだろう。

元気になつたミラは廊下の脇のドアをゆっくり開けた。これまた古いドアは立てつけが悪いのか、嫌な音を立てて開く。ドアの向こうの部屋の中にはテーブルと椅子が置かれていた。両方ともシンプルなデザインで木目が美しい。それらは小さめの窓から入る光を反射して、光ついていた。

「まあ座つて座つて

ミラは埃を手で払つと誠に椅子に座るよつに促した。

「どうもありがとう」

誠は素直に席に着く。するとミラが飲み物を運んできた。コーヒーに似た臭いが漂つ。

「最近仕入れた飲み物や。ゴブつて呑つんだけど飲んでみ

ミラもそういうて席に着く。誠はゴブをわずかずつ呷つべつと飲んだ。マニュアルにこう書いてあつたからである。

『異世界の飲み物、食べ物には気をつけましょう。地球人類には危険な物質が混じっている可能性があります。ですので少量ずつ、できるだけゆっくり食べましょう』

とりあえず誠はこの指示に従つたが、コブは臭いの通り「ページに近い味でおいしかった。

「さてと落ち着いたところで話しひを聞いてもいいかな。さつきからマコトの格好とか気になつてたんやけど……」

リリは話を切り出した。誠はマコトアルを読んで考えておいた答えを返す。

「俺はここから遠い山奥の村の出身なんだけど、今年はひどい飢饉でね。だから街に出てきたんだ。それで、この服とかは俺の村では一般的な服なんだ」

誠が迫真的演技で悲しい顔をする。リリは胡散臭そうな顔をしたが、誠があまりにも悲しそうに見せるのでだまされてしまった。

「そいやつたんか……。ならウチの店で働かない? 恩もあるし、ちょうど人を雇いたいと思つてたところなんよ」

誠にとって願つてもない話だった。なので即答する。

「もちろんー」

誠の答えにリリは嬉しそうに笑い、別の部屋からワインのボトルのようなビンを持ってきた。そしてグラスも用意し、ワインらしき物を注ぐ。

「よーし、マコトも飲み！ それじゃあリラ雑貨に乾杯！ 一人で世界一の店にしようなー！」

誠とリラはグラスを打ち鳴らした。心地好い金属的な音がある。リラして誠とリラの日常が始まったのだった。

## 第一話　「」の世界での田嶋（後書き）

感想・評価をお願いします！

## 第三話 商売を考えよう

「異世界で商売するとときは塩、香辛料、氷菓がオススメだ。ほぼ間違いなく成功できる」

元異世界の商人より

第三話 商売を考えよう

誠はマニアックの家のベッドの上で、これからのこと考え込んでいた。マラはすでに酒に酔つて寝てしまつている。

「救助が来るまで平均五年かあ……。それまで何とかしないとな」

誠はマニアックに書かれていた文字に思わず唸つた。異世界へ救助隊が来るまでには平均五年かかると書いてあつたのである。つまり彼は五年もの間この世界で過ごさねばならないのだ。

「時間もあるし、マラは本氣でマラと商売するところつか」

誠は素早く端末を操作した。そしてマニアックの『異世界で役立つ現代知識集』を表示する。

誠は表示された文字を食い入るように読み始めた。そしてしばらぐ時が流れる。

「ふふふ、これで儲かる！ 完璧だ！」

誠は頭の中で画期的な商売を思いついた。そして魔王のような高笑いをすると意気揚々とベッドに潜る。

翌日、爽やかに目覚た誠はミラに喜び勇んで『おれのかんがえたす』『いしょうぱい』のアイデアを披露した。だが……

「そんなことみんな思いついてるよ。ただ実現が難しいからやらな  
いだけで」

「な、何だと……。この世界の商人はS.Y.O.U.N.E.Nだったのか…  
…！」

誠は絶望感に打ちのめされた。しかし考えて見れば当然である。この世界に来て間もない誠が画期的な商売なんて思いつける訳がなかつたのだ。

「で、でも素人にしてはなかなかの発想やで。誠つて賢いな、あは  
は……」

あまりにも落ち込んだ誠をミラは見かねて、無理にそのアイデアを褒める。なんとも白々しい声がまだ密のいない店内に響いた。しかしそのことが誠の闘志に火をつけた。

「やつてやる、やつてやる。絶対画期的な商売を見つけてやるー。  
そうと決まつたらまずはリサーチだー！」

「待つた！ まだ何も仕事していないでー！」

ミラが店から飛び出す誠を慌てて止めようとした。だが誠の耳には入つていないうで、そのまま誠は街に繰り出してしまった。

「街のこととか何も知らんのに飛び出してもつた。全く、どうなつても知らんで……」

ミラは呆れたように言いつと開店準備を開始した。

その頃、誠は早速困っていた。街の店が何を売っているのか調べようと看板を見たのだが、何故か文字は読めたのだが、名詞の意味がわからないのだ。おかげで調査がまったくはからない。

「なんでこんな中途半端に！」都合主義なんだ。名詞の意味までわかれいいのに。何だよ、エラト販売中つて。さっぱりわからないな」とした誠は帰り道がわからなくなつていて、これに気がついた。

「「ひじじだ？ さっぱりわからないぞ」

誠は辺りを見回すものの、似たような景色が続いているばかり。現代人の誠が中世風の建物の区別をつけることは難しい。彼は後先何も考えずに行動した自分を恨んだ。だが、そうして立ち止まっていてもどうしようもない。なので、周りの人に道を聞こうとした。

「すみません、ちょっと道を教えてくれませんか？」

誠は通りを歩いていた人の良さそうな青年を呼び止めた。青年は誠の呼び止めに応じてその足を止めた。

「ありがとうございます。あの、ミラ雑貨というお店の場所を教え

てもらえませんか?」

青年は首を捻るとすまなさそうに答える。

「知らないなあ。」めんね教えてあげられなくて」

「いえいえ、こちらこそ手間をかけてすみませんでした」

ミラの店は失礼だが、小さい店だ。知らない人が圧倒的に多いだろう。誠は地道に店を探すこととした。

少し歩いたところで誠は裏通りに入つた。ミラの店が裏通りにあつたことぐらいは覚えていたのである。そうして誠が裏通りを歩いていると、何ともステレオタイプなチンピラに遭遇した。太って腹の出た大男に、背の低い一人の三人組である。

「お前、誰に許可取つて歩いてるんだ、ああん?」

「そりだここは兄貴の道だ。通りたかつたら通行料払えや、こらあ!」

背の低い一人チンピラたちは古きよき昭和の香りを放ちながら手を出してきた。大男はそれを見て踏ん反り返りながら誠を睨みつける。しかしながら誠は文字通りの一文無し。お金なんて持つているはずがない。

「悪いけれど今手持ちが……」

誠は頭をかき、後ろに下がりながら答えた。その答えに当然、チンピラたちはキレる。

「なめとんのか！ ぶつ殺すぞてめえ！」

「持つてないですむかボケえ！」

背の低い二人のチンピラたちが殴りかかってきた。誠はそれをかわすと全力で逃げる。別に、今の誠ならチンピラに負けたりはない。しかし、殴つて怪我をさせると後々因縁つけてきて面倒臭そうだから誠は逃げるのだ。

「そこまでよ！ 悪党ども！ この正義の騎士アリス・キャンベラが成敗してくれる！」

誠の目の前の曲がり角から、痛々しいセリフを言い放つ少女が現れた。甲冑に身を包み、長い赤髪をなびかせる少女の姿は様になつてはいる。だが、何となくお寒い空気が辺りを漂つたのだった：

## 第三話 商売を考えよつ（後書き）

感想・評価お願いします。して貰いたいと作者のやる気が上がります。

## 第四話 誠べの豪傑トペリ（漫畫也）

今日はモモキヤグです。

## 第四話 誠VS最強チンピラ

「気をつける。モブでも強いやつはいる」

元異世界の騎士より

### 第四話 誠VS最強チンピラ

誠の目の前に現れた騎士アリス。彼女は剣を抜き放ち、一気にチンピラたちに斬りかかった。

「やべえ！ 兄貴！」

「暴力反対ーー！」

背の低い一人のチンピラは持っていたナイフを手放し、全速力で逃げ出した。そして大男の後ろに隠れる。大男はアリスの前に立ち塞がつた。

「俺は強いぜ……」

大男は低く渋い声でアリスに言った。さらに後ろの一人が付け加える。

「兄貴は本当に強いんだぜ」

「ああ、兄貴はチンピラを超えたチンピラ、超チンピラなんだから

な……」

どこの戦闘民族みたいだが所詮チンピラ。弱いだろうと誠は思つた。誠がそんなチンピラたちに呆れている間に、アリスはかつこよく宣言する。

「強かろうと弱かろうと関係ない！ 悪い奴らは倒すだけだ！」

アリスは剣先を大男に向けた。白銀の刃が陽光を反射し煌めく。大男はにやにや下品な笑いを浮かべていた。

「行くぞ！」

アリスが気迫と共に斬り込む。剣が真つすぐに放たれた。大男の目つきが一瞬にして変わる。大男は腹に向かってくる剣を無駄のない動きで回避した。アリスは必中と思つた攻撃がかわされたことで体勢を崩した。大男はそんなアリスの背中に拳を放つ。

ドスンと鈍い音。それが辺りに響き渡つた。アリスの身体が崩れ落ちる。

「兄貴！ さすがつす」

「やっぱ兄貴は最強でやんす！」

倒れたアリスを見て大喜びする子分たち。それを見て大男もまた大笑いする。

「さて次はお前だ」

大男が誠を睨む。誠は一步後ずさつた。そして逃げ道がないの

かキヨロキヨロと見回す。

「逃げよつとしても無駄だぜ？」

大男が逃げよつとする誠に告げる。誠はこゝにきてよつやく怖いと思った。さつきまで「チンピラ」とき倒せると思っていた。しかしアリスを倒したそのあまりに意外な強さ。誠は大男に勝てるかどうか不安に思つていたのだ。

「チンピラのくせに強いなんていじめか！ でもこゝなりやしかたない！」

誠は半ばやけになつて大男に殴りかかる。フォームは無茶苦茶、隙だらけだ。しかしがスピードは速い。大男は少しヒヤリとした。が、誠の拳を回避して、さうにがら空きとなつっていた誠の腹を殴る。だが……

「い、痛てえ～！ どんな身体してやがるんだ！」

突然鉄の塊を殴つたような激痛が大男の手を襲つた。大男が見てみると紫色になり腫れ上がつてゐる。それに対して誠の腹はどうにもなつていいない。

「うわあ……。本格的にどうかしてるぞ俺の身体」

誠自身も頑丈過ぎる「」の身体に大いにビビる。そのため誠の動きがしばし止まつた。

「あいつ強すぎるぜ。今のうち止まらかねー」

「へい兄貴！」

チンピラたちは誠が止まつてじるうかこしのび足で逃げ出していく。そしてあともう少しで逃げられる距離まで来た。

「ちょっと待て！ 逃げるんじゃない！」

誠はチンピラたちが逃げ出していることに気がついた。そして呼び留める。チンピラたちはぎこちない動きで後ろを振り向いた。そして日本人もビックリの見事なまでの土下座を披露する。

「すいません、すいません、すいません……」

チンピラたちはエンドレスで謝り始めた。誠は怒る気も失せて困惑。

そうしてこるうちに後ろから少女の声がした。

「痛たた……おおー 協力感謝するぞ」

アリスは誠が三人を平伏させているのを見て、腕に手錠のよつな物をかけた。そして、三人をどこかに連行しようとする。

「この礼はいつかするからな。君、名は何と言ひへ？」

「誠です。あの、ちょっといいですか？」

「なんだ？ 言つてみなさい」

「実は……」

誠は自分が迷子であることを告げた。アリスは呆れたよつな顔をしながらも、店までの道を案内する。いつしてもやく誠はミラの店まで帰つたのだった。

「遅いなあ思つてたら騎士と一緒に帰つてくるやなんて……。私の想像を超えすぎやで！」

「まあまあ、そう怒るな。誠がいなかつたら私は大変なことになつていた」

ミラの店の前。ミラが帰りの遅かつた誠を怒るのを、アリスが上手くなだめようとしていた。だがそれは逆効果だったようだ。

「いや、だいたいあんたがチンピラなんかに負けること事態がありえんやろー。騎士やつたらそんな連中ぐらいバシッと倒しやー！」

ミラが強烈な言葉を放つた。それを聞いたアリスの顔が曇る。そして地面にしゃがみ込んだ。

「そうだよな……。私が弱いからいけないんだよな……。それに私がイタいこともそもそもダメなんだよな……」

アリスは地面に文字を書きながらつぶやき始める。怪しい雰囲気があたりを漂う。

「あかん、呪われそうで怖すぎる」

「ああ、祟られそうで怖すぎる」

誠とミラは店の奥へ引っ込んだ。店の前にはアリスだけが取り残された。アリスは一人つぶやき続ける。

これによつてこの日の売上がほぼ無しになつたことは言つまでもない……。

## 第四話 誠／＼最強チノペル（後書き）

感想・評価をお願いします！

## 第五話 力の使い道？（前書き）

かなり急展開です。

## 第五話 力の使い道？

「異世界は必ず不思議生物がいる。例えばボーモンとかスラムとか……」

異世界環境活動家より

### 第五話 力の使い道？

夜、誠が寝た後でミラは一人自室で考え方をしていた。誠のことについてだ。

「誠ってほんまに何者なんやろ。出稼ぎに来た村人って言つのは嘘だろうし……。あの力、人間かどうかすら怪しいで」

ミラは誠の嘘を見抜いていた。だが誠には助けてもらつた恩があることと、誠が本当に困っている様子だったのでミラは誠を雇つたのだ。

「でも悪い奴ではなもんやしなあ。そのうち話してくれるよな」

ミラはそつこつと蠟燭を消し、眠りについた。

「誠、今日こそしつかり商売するでえ！ 昨日売れなかつた分しつかり売らなあかんからな！」

「//リラ」は『氣合』いが入っていた。誠も昨日できなかつた分『氣合』いを入れる。

「よし、//リラ雑貨開店やー。」

「//リラは店の戸を押し開ける。そして開店中と書かれた看板を道に出した。

「誠、ウチは商品の整理してるからしっかり店番するんやで」

「//リラはそういつて店の奥に引っ込んで行った。店のカウンターには誠だけが残される。しばらくして誠にとつて初めての客が来た。紫色という地球じやお田にかかるない髪色をした女性だ。女性はしばらく店内を見た後で小さな瓶を手に取つた。そしてそれが気に入つたようでカウンターに持つてくれる。

「//リの香水いくらかしら?」

「はいはい、少しあ待ちを」

誠は//リラに手渡されていた商品の値段表のページをめぐり始めた。値段表には百近い商品の値段が書かれていた。なんでも屋のようないつた//リラの店は商品が多いのだ。しかし誠はすぐに目的の商品の値段を見つける。

「えーと//リラアドリンクになります」

誠が値段を告げると女性はびつびつとつぶやく。そして誠に値段交渉をしてきた。

誠が値段を告げると女性はびつびつとつぶやく。そして誠に値段交渉をしてきた。

「三五百円だと食事に使うお金がなくなっちゃうわ。一千円ならなんとかなるんだけど……」

女性は流し田で誠を見る。白衣ワンピースのような服の間から豊満な胸も顔を覗かせた。誠は頬を真っ赤に染めた。

「む、無理です。値下げはできませんー！」

誠はクラクラしながらも言い切る。それを聞いた女性は誠にしな垂れかかってきた。

「ねえ、お願ひよーー安くしてくれたらこい」としてあ・げ・る

誠は理性を総動員して誘惑を振り切る。もし、ここが誠の店だったら誠の理性は崩壊していたかもしない。だが、ここはミラの店。誠の理性は女性の誘惑攻撃に見事耐え切った。

「ダ、ダメですよ。値下げはできないー！」

「もうひ、つれないわねえ。ほー、三百ドランよ

女性は金貨を懐から三枚取り出し、カウンターの上においた。そしてそのまま歩き去っていく。

「とんだお客だつたな……」

女性が去つた後で誠はしみじみとつぶやいた。

その後、誠は順調に商売をこなした。お客が数人来たが、とくに問題はなかった。そして一時間ほどたつたところでミラが店の奥

から出てきた。

「店番は大丈夫やつたか？」

ミラは誠が心配だつたのかすぐに話しかける。誠は苦笑しながら答えた。

「最初に変なお客が来たけど、他はなんとか大丈夫だつた」

「せうか、それならよかつたわあ。なら良い時間だしあ厘にしよか」

ミラは店の看板を休憩中にするべく、また店の奥に入つていく。誠もそのあとについて行つた。

「アメリカ神様、日々の糧を『えてくださる』ことを感謝いたします」

ミラはそうお祈りして食事を取り始めた。誠もミラのスタイルに合わせて見よう見まねでお祈りしてから食べる。食卓の上には湯気を立てる料理が並べられていた。クロワッサンのようなパンを中心とする西洋風の食事だ。

「うーん、おいしいー。ミラは料理が上手いな」

誠はスープを飲みながら、ミラを褒めた。スープはブイヨンが効いていておいしいものだった。

「ふ、当たり前や。ずっと一人で暮らしてれば『れぐり』にはなる

ミラは誠の賞賛に照れながらも胸を張る。そして満面の笑みを浮かべた。二人の間になごやかな時が流れる。

その後じばらぐして、誠が食事の最後の一 口を食べた。

「 ああ、 また仕事するでえ ！」

「 ょし、 また頑張るとしますか 」

ミラと誠は そう言つと食器を片付け、 店へと戻る。 そしてまた働き始めた。

午後からは結構な数のお客が来たが、 誠は一人一人丁寧に接客をしていった。 ミラはその間、 帳簿をつけていた。  
そうして いるうちに あつと いう間に 夕方になつた。

「 そろそろ店じまいの時間や。 今日ば」 苦勞様

ミラは帳簿を閉じてカウンターに しまつ。 そして笑いかけながら誠をねぎらつた。 ねぎらわれた誠の方もミラに笑みを返す。

「 いやこやミラの方」 ジヤー苦勞様だ

誠は そつこつ 店の戸を閉めよつとする。 しかし、 そこに一人の少女がやつてきた。

「 すいません！ ドラゴン、 ドラゴンの爪の粉は売つてませんか！」

白いローブを着た小柄な少女は、 その長い金髪をなびかせながら店に飛び込んできた。 誠とミラは 唸然としたが すぐに対応する。

「 ドラゴンの爪の粉？ ちょっと待つてや、 在庫があるかもしねい 」

「//リは店の棚を勢い良く漁る。だが、しばりしても肝心の商品は見つからない。

「あかん、 そう言えば売り切れだつたわ

「//リは最近「ドラゴンの爪の粉」が売り切れていたことを思い出した。存在すら忘れていた商品だつたので覚えていなかつたのだ。

「そんなん！ 困りますぅー！ //リでも売つてなかつたら//リで買えぱいいんですかあ～！」

少女はあたふたと騒ぎ立て始める。棚にぶつかつたり、商品を落としたりして大変だ。

「そんなんに騒がんといでやー！ ほんとに一体どないしたん？」

「実は先生が魔法に失敗して……。と、とにかく//リの爪の粉がいるんですけど！ お金ならいくらでも払いますからー！」

「でもなあ、あれは貴重な品だから……金積まれても入荷はなかなかできないんや……」

そうこう//リの言葉を聞いてなお少女は//リにお願いしていく。//リは誠を近くに呼んだ。そしてそつと耳打ちをする。

「誠、//リ//リ「//リ」と戦つ勇氣ある？ あの子相当困つてゐるよつやし、魔法使いと繋がりができるのはチャンスなんや。古代種倒せゆうわけやない、飛竜でいいから。お願い、頼むー！」

「僕はそういうて誠に頼み込んだ。僕は誠ならドラゴンを倒せると思ったのだ。

「そんなの無……でもないか」

誠はすぐに断りうとしたが、自分の身体が恐ろしく強くなつていふことを思い出した。今の身体ならなんとかなるかも知れない。そう思つた誠は惱みに惱んだ末に引き受けることにする。

「わかった。俺がドラゴンを退治して田代の物を仕入れよう」

誠はこうしてファンタジーな生物、ドラゴンと戦うことになつたのだった。

## 第五話 力の使い道？（後書き）

感想・評価をお願いします。

## 第六話 ドラゴンマスター誕生？（前書き）

久しぶりの投稿です。最近忙しかったのでなかなか出来ませんでした。

## 第六話 ドラゴンマスター誕生？

「ドラゴンとの戦い。それは冒険の醍醐味である」

異世界冒険家より

第六話 ドラゴンマスター誕生？

ミラの店に謎の魔法使いが来た翌日、誠はドラゴンを倒すべく山に来ていた。

「こがあたりか？ 何もいないが……」

誠は地図を見ていた顔を上げて、辺りを見回した。ドラゴンの巣があるはずだった。しかし辺りはゴツゴツとした岩場があるだけで、それらしき姿は見えない。誠はがっかりすると手頃な大きさの岩に腰掛け、休憩を始めた。そして慣れない山道に身体は疲れなくても精神的に疲れたのか、心地好い陽気の中で誠はウトウトする。

「ふうああ～……つていかんいかん、こんなとひるで寝たらドラゴンに食われてしまつ」

「その通りだぞ人間」

しばらくして誠が眠気を覚まして独り言を言つと、それに応える声がした。誠は後ろをソウツと振り向く。そこには赤い鱗に大きな口、そして巨大な牙を持つ生物がいた。

「ド、ドラゴンオオオーン！」

誠は叫びながら岩から降りるとファイティングポーズを取つた。ちなみに誠は丸腰だ。誠の場合武器は逆に邪魔だろ？と書いて//リラが貸してくれなかつたからである。

「おぬし丸腰か？ 羞めたものよ。古代竜ララスといえば昔は有名じゃつたのだがのう？」

ドラゴンは器用に人語で笑つた。大きく開かれた口は誠など十人ぐらいまとめてひとのみにしてしまえそうだ。

「なんか予想してたより大物だ……」

誠はあまりにもスケールの大きな敵に圧倒されて腰が引けた。しかし今更逃げるに逃げられない。開き直つて誠は戦う覚悟を決めた。そしてもう無我夢中でドラゴンの前足を殴りつける。

鈍い炸裂音がした。ドラゴンの鱗がひび割れ、血が噴出する。

「ウギヤアア！ 貴様何をした！」

ドラゴンは想定外の痛みに悲鳴を上げた。さらに誠に向かつて殺気をぶつける。

「た、ただ殴つただけだ！」

誠はドラゴンの様子に恐れをなしながらもさう言つてきつた。実際にそうなのだから仕方ないのだが。

「馬鹿を言つた！ そんな程度で傷ついてたまるか」

「ドラゴンはもう叫ぶと一段と殺氣を強めた。そして鋭い爪を振り下ろす。誠はドラゴンの殺氣に立ちすくんでしまってその場から動けなかつた。

「な、何い！」

ドラゴンは驚愕した。自身の爪が誠の腕によつて受け止められたからである。しかも、顔の前に突き出されたその腕は素人がどうさに出したもののようにしか見えない。素晴らしいありえないことだつた。しかし、そのことに一番驚いたのは誰あらう誠であつた。

「うおおー、何だこりやあ！」

誠は恐怖で閉じていた目を開けると驚きのあまり奇声を上げた。そして後ろに飛びのく。その時ついでにドラゴンの爪は弾き飛ばされ、ドラゴンは後ろに尻餅をついた。

「あ、ありえぬ。どうして人間にそんな力があるのだ。それもこんな霸気のない奴に……」

ドラゴンは恐れという感情を生まれて初めて覚えた。古代竜ララスと呼ばれる彼女は、ずっと最強の存在だつた。それゆえに恐れなど感じたことはなかつたのだ。でも彼女のどこかはかすかに期待を抱いてもいた。誠が自分を超える存在であることを。彼女は最強ゆえに孤独な存在だつた。だから、自分を超える存在によつて孤独から解放されたいとも感じていたのだ。

誠はララスにできた隙を見逃さなかつた。誠はララスの腹にパンチを決める。その不格好なフォームから繰り出されたパンチは、見た目に反して凄まじい威力を發揮した。

「キシャアア！」

ララスは咆哮を上げながら吹っ飛ばされた。数十メートルはあるかという巨体が木の葉のように宙を舞う。そのあとでドシンとした揺れが辺りを襲つた。

「今ならヤ チヤぐらご倒せるかも……」

誠は自分のしたことに半ば呆然としながらつぶやいた。誠からしたらずいぶん古いネタが入っていたのはきっと気にしてはいけない。

「もう怒つた！ 貴様など消し去つてやる！」

ララスは砂埃の中から起き上がりと悍ましいほど叫びを上げた。さらに口を大きく開き、周囲の魔力を集め始める。ドリゴンの必殺技、ブレス攻撃の準備だ。もしこの攻撃を破られたらララスに打つ手はない。その時は負けを認めてやるひつと彼女は思った。もつともほとんどありえないことだろうが。

「これはちょっとやばくないか！」

誠はララスの口から溢れる青白い光を見てすぐに逃げ出した。だがもう遅い。ララスは高笑いしながら無慈悲にブレスを放つた。しかし彼女の心のどこかで誠がブレスに耐えることを期待している部分がないでもなかつたのだが。

「耐えるものなら耐えてみろお～！」

巨大な光の球が周囲の岩を薙ぎ払いながら一直線に誠目掛けて飛

んでいく。誠は精一杯走つて逃げようとしたが、無駄に終わった。  
誠の身体を青白い光が飲み込む。

「ははは、このララスにやはり人間が勝てる訳がなかつたのだ！  
あーはつは」

えぐり取られた山肌。熱で溶けた巨大な岩の数々。それらを見てララスは自身の勝利を確信した。そしてご機嫌になつたララスは悠々と巣のある方へと向かつて行く。今日はやたらに強い人間勝つたことを祝つてご馳走でも食べようかと思いながら。ただし、誠があつさりと倒れたことにララスは心の奥底ではほんのすこし失望感を感じていた。しかし彼女がそれを表に出すことはまずないだろう。彼女はそういう難しい性格をしていた。

そう思つていた時、彼女の耳に聞き覚えのある声がした。

「あちやあちやあちやー！ 熱い！ 死ぬー！」

誠は溶岩と化した地面から起き上がるとその熱さに悲鳴を上げた。さらに彼は熱湯風呂に落とされた芸人のような動きをしながら溶けてないところまでたどり着くと、足をふつふつする。

「……あはははは、負けた、負けたぞ人間よ。よし、こうなつたらそなたを主として認めてやるつ」

ララスは誠の様子を見て大笑いすると、そう言い放つた。ドラゴンは何よりも力を尊ぶ種族だ。ララスが勝者の誠に仕えることを申し出たのはそれほど奇妙なことではない。さらに彼女自身が誠が大騒ぎしているのを見て、彼を純粹に面白い奴だとも思つたことも関係している。

しかし、それを聞いた誠は困つたような顔をした。

「うーん、うちには君を飼えるようなスペースはないなあ……。それに食費も掛かりそうだし」

誠は何とも所帯じみたことを言つた。もちろん誠もドラゴンに乗れたら格好良いな、とかは思つてはいる。だが実際に飼うとなると問題が山積みだらうと誠は思つたのだ。それを聞いたララスは一層腹を抱えて笑つた。

「ふ、ふはは、小さなことを気にする奴だ。良からう、これなら問題あるまい」

ララスはそう言つとぶつぶつと呪文を唱えた。やがてその巨大な身体を光が包む。

「よろしく頼むぞ主殿!」

光が収まると、そこには妙齢な女性の姿になつたララスがいた

……。

## 第六話 ドラゴンマスター誕生？（後書き）

感想・評価をお待ちしております！

## 第七話 増える仲間とミラの頭痛

「異世界では毎日がトラブルだ。いついかなる時も冷静に」

異世界経験者より

### 第七話 増える仲間とミラの頭痛

誠は田の前に現れた美女に困惑していた。

「え、君は？」

誠は辺りを見回しながら女に尋ねる。女は少し不機嫌になつた。

「何を言つている。私はララスだぞ」

「や、やつぱり……」

誠はがっくんできたよつてつぶやくと、何かに気づいたのかララスから田を逸らす。

「ふ、服を着てくれ！」

誠の要請にララスは怪訝な顔をした。

「それを言つなら主だつて裸ではないか」

誠は自身の身体を見た。誠の身体にはわずかに”服だったもの”がへばり付いていただけだった。誠の顔がどんどん赤くなつていいく。

「あああああ～～！」

誠の魂の叫びが山に響いた。

「誠……」の子は誰や？」

//ラの店の前にぼろきれを着た誠とララスが立つっていた。//ラは疑わしげな目でララスを見ている。

「これにはそれなりに深い訳があつてね……」

誠はたどたどしい様子で説明をした。//ラは頭を押されながらも誠の説明に聴きに入る。

「誠はどんなだけ規格外なんや……。はあ、あかんちよつと頭痛い」

//ラは棚から瓶を取り出すと、中の液体を一気飲みする。そして、風呂上がりのオッサンのよつと/orハーツと言つて疲れた顔で誠を見た。

「びつくりしたけどまあええで。家族が多いのは楽しいから

//ラはそのままほどから店の入口で突つ立つていたララスの前に立つた。そして手をララスに向かつて差し出す。

「私はミラ、よろしくな」

「ふん、私は主以外の人間になど興味はない」

ララスはそつけなくミラの手を払い除ける。ミラは頭から湯気を出して怒る。

「いらっしゃる、なにするんやー。これから一緒に住むことになるんやで。頼むから仲良くしてな」

「私は主には従うがそれ以外の人間と馴れ合つつもりはない」

「な、なんやてえー！」

ミラはララスのふてぶてし態度にいよいよ怒りに火がついた。拳を握りしめ、息を荒くする。

「ラ、ララスー！ ミラにそんなこと言つたらダメだろー！」

今にも爆発しそうなミラを見て、たまらず誠が一人の間に割つて入った。二人はすゞすゞと離れる。

「仕方ない。主が言つなら付き合つとしよう」

ララスはしぶしぶといった様子でミラに手を差し出す。ミラはやたらとニコニコしながらその手を握った。ただミラの手には赤々と炎が燃えている。

「よろしくな？ 一応」

「//ララララスの田を表面的にはこいやかに見た。一人の視線が空中でぶつかり合つ。見えない火花が飛び散る。

「そういえばミラ、ドリーパンの爪の粉は用意できたからあの魔法使いさんに届けないと」

誠は険悪な雰囲気をばらまいている一人を何とか引き離そうとした。ミラはそれを知つてか知らずか素直に誠の思惑通りに荷物を届けに出掛けることにする。

「せやな。なら粉を頂戴。ウチが届けて来るわ」

誠は小さな瓶をミラに手渡した。ミラはそれを手にすると店から飛び出していく。ミラが見えなくなつたところで誠はラララスに説教をした。

「ふう、ララス、もつと//ラと仲良くしなきやダメだぞ。何でみんな横暴な態度を取るんだ。もつと優しくできないのか」

「私は古代竜だ。その私にとつて主以外の人間などどうでもいい。私がお仕えするのは主だけ、優しくするのも主だけなんだ」

誠はラララスの言葉にうれしいような恥ずかしいような感情を抱きながらも、これではダメだと気持ちを入れ替える。

「他の人間とも仲良くしてくれ。それができなければ街では生きていけないぞ」

「ううむ……。前向きに検討しよう」

ララスはそつこつてお茶を濁した。誠は少しだつ変えて行くしかないかと、ララスの意識改革を諦めてミラを待つことにする。しばらくして店にミラが帰ってきた。何か良いことでもあったのかホクホク顔だ。

「ただいま。ドライの爪の粉、凄い値段で買い取つてくれたで！あと、後田誠に直にお礼がしたいから店に来るやつや。楽しみにしてきこ」

よつぱり高値で売り付けたのか幸せそうな顔をするミラ。しかし、誠はその様子に微妙な恐怖を感じた。ちなみに魔法使いの女の子が財布が空になつて泣きそうになつたのはミラだけの秘密だ。

「あと、今日はララスの歓迎会も兼ねてたくさん飲むで」

ミラはタ日が差し込む店の中の整頓をすると、早めに店じまいした。そして一階に上がつて宴会の準備に取り掛かる。

「よし、今日は腕によつをかけるでえー」

ミラがそう言つて台所に籠る。しばらくすると良こにおこがしてきた。誠とララスもにおこにつられて台所に行き、ミラを手伝つ。またしばらくすると、湯気とともにたくさんの料理が出来上がつた。

「いただきますー！」

テーブルに並べられた料理を前に、誠は以前からの習慣に従つて挨拶をした。それを聞いたミラが誠にワインをなみなみと注ぐ。さらにミラはララスのグラスの方にもたっぷりとワインを入れる。

「誠もララスもたくさん食べて飲んでや。今夜は祝いなんやから！」

ミラは上機嫌でワインを飲む。そしてその宴会は深夜まで続いた。

ひつしてまた仲間が増えたりしたが、誠は何とか一日を無事に過ごせたのだった……。

## 第七話 増える仲間と//の頭痛（後書き）

感想・評価をお待ちしております。

## 第八話 アール騎士団ただいま参上！（前書き）

改めて言ひますと、この小説は基本的に「メテイー」です

## 第八話 アール騎士団ただいま参上！

「異世界には我々には理解できない変わった人が多い」

異世界探検家のレポートより

第八話 アール騎士団ただいま参上！

誠とララスの戦いから数日後。今日も誠は店番をしていた。ミラは仕入れに出かけ、ララスは奥で品物を整理しているので店先には彼一人だ。

「うーん、やつぱり異常はないな。どうなってんだか」

誠は客がいないのを良いことに、マニュアルに書かれていた『自分で出来るメディカルチェック』を実践していた。誠は自身の身体の変化に不安を感じていたのだ。しかし、どうやらそれは杞憂だつたらしい。

「まあ良いか。悪いことは今のところ起きてないしな」

誠は考え込むことを止めて、マニュアルを閉じる。そして今度は茶色の厚い本を取り出した。誠はパラパラとページを開くと、本に書かれている単語を音読する。その本の表紙には『初歩から始める単語集』と書かれていた。

「イルト、イルト……」

自らに備わった中途半端な言語翻訳能力を恨みながら、誠は单

語を読み上げていぐ。すると、集中している誠に誰かが声を掛けた。

「おーい、誠！ アリスだ、返事をしてくれ」

「ああアリスさん。何か買いにきたんですか」

誠が顔を上げてみると、アリスが見慣れない一人の男を連れて道に立っていた。誠はその様子を見て、アリスたちを店に招き入れる。

「最近変わった噂を聞いたのでな。何でも誠が古代竜を倒したとかいつ内容の。……まさか本当に倒したりはしないよな？」

アリスはどこから聞き付けたのかそう尋ねてきた。噂が伝わるのはどこの世界でも早いらしい。

「いえ……本当に倒しちゃいました」

誠は凄い形相で尋ねてきたアリスに申し訳ないかのよつに答えた。

きつとアリスも引くんだろうな……。誠が漠然とそう思つてはいる

と、アリスは誠の予想を裏切り、満面の笑みを浮かべた。

「そうか！ なら誠、まだ骨とか鱗は売つてないよな？」

「売つてないといえば売つてないですが……」

売るも何もない。竜 자체を仲間にしたんだから。だが誠がそんなことを言つはずがない。

「良かった！ ならその素材を売ってくれないか。古代竜の素材を使つた剣を持つのは私たち武人の夢なんだ！」

「そ、それが……」

「どうした、まさかないのか……？」

アリスは顔を俯け、肩をすくめる。その表情は愁いに満ちていた。

「え、うぬ、ああつと……といひでそこにはいる一人は誰なんですか？」

誠はアリスの負のオーラに溢れた姿を見て、そんな物はないとも言えず、無理に話題を逸らす。

「二人のことか？ 何、私の部下だ」

「部下がいたんですか……」

どこかでアリスのことを下つ端だと思つていた誠。それだけになかなか意外な事実だつた。しかしアリスはさらに衝撃的なことを口走る。

「私はこの街の騎士団長だから部下ぐらいいて当然だ」

アリスがそう言つた途端、誠の時が止まつた。そして誠は口マサリのようにぎこちない動きで口を開く。

「な……なんだとおお——！」

誠の渾身の雄叫びが街にこだまする。道行く人々はみな一斉に誠たちの方に注目した。

「いきなり叫ぶな！ 私まで恥ずかしいだろ！」

「いや、アリスさんが団長つてありえないでしょ！ イタいし弱いし、性格後ろ向きだし！」

誠は興奮のあまりアリスに對して思つていることをすべてぶちまける。するとアリスは紫と黒の混じりあつたような雰囲気を放ち始めた。

「わ、私はそんな風に思われていたのか……」

アリスは地面にしゃがみ込み、つぶやきながら文字を書き始めた。周囲の人々はそれを目にすると、見てはいけないものを見てしまつたかのように目線を逸らして逃げて行く。その様子にアリスの後ろに控えていた騎士が頭から湯気を出して怒る。

「貴様あ！ 団長はガラスの心を持つてゐるんだぞ！ 発言には気をつけろ！」

「確かに悪かつたですが、ガラスの心つて……騎士なら精神的にも強くなりましょうよ」

「だまらつしゃい！ ヘンリー、こいつを駐屯所まで連行するぞ！」

男は誠の手に繩を掛け、連れて行こうとした。しかしそれをもう一人の男が止める。

「副団長、こいつは古代竜を倒したらしい猛者であります！ 全員揃わないと勝てないかと！」

「つづむ、それもそうだ。おい、貴様。我々はすぐに戻つてくるからな。逃げるなよ！」

男たちはそういうとどこかに向かつて走り去つて行つた。何故か一番大事なずのアリスを残して。

「どうした主よ。先程から騒々しいが」

店の奥から騒ぎに気づいたララスが出てきた。だが次の瞬間、彼女の目が驚愕によつて限界まで見開かれる。

「そやつは何者だ。その負のオーラ、さては魔王か！」

「ただの人間だよ。性格が後ろ向きなだけで。あつそりだララス、この人を店の奥に入れてくれないか？ ここにいられたら商売の邪魔になつちゃうから」

誠は盛大な勘違いをしているララスに説明をすると、アリスを店の奥に引っ張つて行つてもらつた。

「ふう、疲れた～」

誠は椅子に深く腰を沈めると、一息ついた。そして穏やかな時を過ごす。だがそれはすぐに終つさせられた。

「そこまでだクロサキ マコト！ 我らアール騎士団が天に代わつ

て貴様を討つ！　トウウッ！」

いつのまにかお向かいの家の屋根にいた男たちが、そう高らかに叫ぶと道路に向かつてジャンプした。さらに男たちが着地すると同時に、屋根から煙りが上がって紙吹雪<sup>ハグロ</sup>があたりに舞い落ちる。

「さあ我らの正義の力を思い知れ！　総員突撃だあ！」

「え、あ、ちょつ！」

「ひつじて誠はアル騎士団となぜか戦うことになつたのだった……。

第八話 アール騎士団ただいま参上！（後書き）

感想・評価をお願いします！

## 第九話 騎士とネタ（前書き）

タイトル通り、ネタばっかりです。わからない方は面白くないかも……。

## 第九話 騎士とネタ

「異世界でも人はネタなしでは生きられないらしい」

異世界研究家より

### 第九話 騎士とネタ

「ふふ、もう逃れられはせんぞ！」

誠は騎士に取り囮まれていた。五人の騎士たちがガツチリとガードしていく彼に逃げ場はない。しかしそんな誠の顔には恐怖というよりむしろ呆れの感情が浮かんでいた。

「すいません、今俺店番中なんです。後で来て下さい。店の営業の邪魔です」

「な……何だと。な、舐めおつて。お前はこのアール騎士団スペシャル・バトル・フォーメーションが怖くはないのか！」

「スペシャル・バトル・フォーメーションって普通に取り囮んでるだけじゃん！」

……確かに、五人の騎士は普通に武器を構えて誠の周りに立つているようにしか見えなかつた。しかし、彼ら騎士の中ではそうじやないらしー。

「貴様の田はふしあなのようだな。毎朝一時間の猛練習の成果が分からんようだ……」

「もつとまともなことに時間を使えよー。」

誠がそう言つた途端、騎士たちの田の色が変わつた。そして不気味に沈黙する。

「……やはり貴様と私たちは相容れない存在のようだ……。ヘンリー、こいつを消せ！」

「ははつ副団長ー。」

先程、店にきていた男が一步前に出てきた。背の高い優男で、漫画とかに出てきたら間違いないヤラレ役といった感じの男だ。

「ふふ、僕の一いつ名は『前方不敗』だ。君に勝てる見込みはないよ！」

ヘンリーが誠に斬り掛かつた。彼の剣の残像が無数に見え、誠の動体視力を持つてしてもその本体を捕らえられないほどだ。誠は剣を避けることをあきらめ、その頑丈極まりない体で受け止める。

「はは、君はその程度かい、ひやつはああー！」

テンションがおかしなことになつていいヘンリーは、奇声を上げながら誠を文字通り目にも止まぬ速さで切り刻む。そうしていふると誠が大変なことに気がついた。

「俺が大丈夫でも服が！」

「」のままでは裸にされてしまう！ そう危機感を募らせた誠はなんとか攻撃から逃れようと横に移動した。すると、あっさりと攻撃から逃れられた。それを見たヘンリーは慌てて『カ一歩き』で移動して、誠のいる位置を再び正面にとらえる。

「まさか『前方不敗』って真正面にしか攻撃できないとかじゃないよな？」

「そ、そんな訳ないだろ？ な、何を言つているんだ」

今までのテンションはどこへ行つたのか、ガクガクと震えながらヘンリーは言つた。あまりにもあからさまな様子だ。

「それならつ！」

「やめろ、よせ！」

誠は右へ左へとちょこまかと動き出した。ヘンリーはカ一歩きで必死に追いかけるものの追いつけない。やがて疲れた彼は足を絡めて倒れてしまった。

「……勝ちかな？」

「くそっ、もつと修行して『前方後方側面不敗』になつておけば良かった……ぐはあ」

倒れた時の打ちどころが悪かったのかそのまま意識を手放したヘンリー。その様子に誠が微妙な顔をしていると、騎士の一人がそれ

を背負つてどこかへ消えていった。そしてじょりくしてから戻ってきた。

「やはりヘンリーには無理でしたな。副団長、私にお任せを」

「つむ、任せたぞ」

戻ってきた騎士は副団長に確認を取ると、誠に向かつて何故か日本刀を構えた。誠は何故日本刀なのかと不思議に思ったが、ろくな理由はなさうなので気にしないことにした。

「私はゴーハ。ヘンリーとは一味も一味も違つぞ。貴様などにの『斬鋼劍』の鎧にしてくれる！」

ゴーハは刀を抜き放つた。荒々しい刃紋が黒鉄の刀身に表れた見事な刀だ。ゴーハはそれを大袈裟に振りかぶり、上段の構えを取る。刀が陽光を纏い、鮮やかに煌めき、ゴーハの身体から圧迫感が放射される。その風格たるやまさに強者。

しかし、誠がここで言つてはならぬことを言つた。

「今なんとなくネタが読めたんですけど。まさかその刀、鋼しか斬れないとかじやありませんよね？」

「ゴーハが氷になつた。そして数分たつてようやく溶けたのか、口だけを小さく動かして言葉を発する。

「……貴様を斬るのはやめておこう。またつまらぬ物を斬りたくはない……」

「ゴーハはそう言い残し、哀愁を漂わせながら明後日の方へと去

つていった。誠はなんとなく手を振つてそれを見送る。

「お、おのれ我が騎士を一人も……よしバラン、お前が奴を倒すのだ！」

副団長が小柄な騎士を指差して命令した。するとその小柄な騎士は突然腹を抱えて道路を転げ回る。

「副団長、私は急性盲腸になつたので戦えません！ くそ、腹さえ痛くなければあんな奴、簡単に倒せるのに～」

「何たることだ……。後で医者に見せてやるからな。ならばルイス、お前がやれ」

誠の目にまどり見ても仮病に見えるのだが、副団長にはそう見えないらしい。彼はバランが戦えないと判断すると、ルイスというもう一人の騎士に戦つよう指示した。するとルイスが頭を抱えて膝をついた。

「も、申し訳ありません。私はたつた今脳内出血を起しましたよう……。チクシヨ～頭さえ痛くなければ～」

後半棒読みでルイスがそういうと、副団長は啞然して固まる。そして突然、高らかに狂氣を孕んだ笑い声を出し始めた。

「ひつなつたら仕方がない。私自らが戦おう。言つておくが私は強いぞ？ 貴様は死ぬかもしれん。そうだ、今から三分間だけ待つてやる！ その間にアリス団長に千回謝つたら許してやらんでもない」

「三分間で千回謝るのは無理だ」

「ならば交渉決裂だ！ アール騎士団副団長ライハルト・ローレンス、推して参る！」

いつのまにか黄昏れに染まっていた街の中で、男たちの戦いが始まった。

## 第九話 騎士とネタ（後書き）

感想・評価をお待ちしています。

ひとめか観新停止の知らせ（前書き）

重要なお知らせですのでもご覧ください。

## ひとまづ更新停止のお知らせ

このたびなのですが、この小説をひとまづ打ち切りにすることを決めました。

気分が乗らずほかの小説が増えてしまい、そちらがメインとなつてしまつているからです。

ですのでそちらが片付くまでこちらのほうを更新停止とさせていただきます。

楽しみにしてくださつていた読者の皆様には申し訳ありませんが、"じ"と"の"ほどなにとぞお願いします。

```
#####
#####
```

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8517n/>

---

異世界対応マニュアル！

2011年5月31日11時08分発行